

KBS 視察報告：ケースメソッドと保育者養成

境 愛一郎（広島大学大学院・院生）

ケースメソッドは、保育者の養成や研修に関する分野では聞きなれない用語である。他方で、文章や映像などの形式で記録された実践事例について、グループで議論を交わすことで、実践に対する知識や理解の向上や、問題解決を図ろうとする活動は、すでに一般的な学習および研修の方法として定着している。こうした方法が、ケースメソッドの定義に該当するか否かはともかく、手順や目的には類似する部分が多く見られる。一方で、保育における上記のような方法は、ケースメソッドのように、一つの方法として明確に理論化・体系化されているとは言い難く、その方法を用いた教え方を学ぶことができる機会も少ない。KBSにおけるケースメソッド教授法は、教え方を学べる授業として実に興味深いものであり、将来的に保育者養成に携わろうとする私自身にとっては、視察を超えた貴重な実践的学びの機会であった。本稿では、視察報告として、特に印象深い二つの事項について取り上げ、検討したい。

（１）教え方を学ぶということ

視察した授業では、受講者が持ち回りで講師役を担当し、他の受講者を前にした模擬授業を行う。こうした模擬授業自体は、保育・教育の分野でもよく見られる光景である。しかし、その目的には、大きな違いが感じられた。保育・教育における模擬授業の目的は、授業の目標やねらいの達成にあり、方法は文字通りに方法である。全受講者の関心は、目標やねらいに向けられ、方法はそれに引っ張られるように議論される。この場合は、教え方について学ぶというよりも、「教えること」について総合的に学んでいるという方が正確といえるだろう。

これに対し、KBSでの模擬授業の主目的は、方法を使いこなすことであったように思われた。授業者は、うまく議論を導くための発問や立ち回りについて、ほぼ徹夜で考えてきていた。当然、議論の終着点や目標などは想定されるが、それはあくまで方法を学ぶための手段である。先の「教えること」を学ぶ場合と比較して、こちらはより純粋に方法や技法としての「教え方」を学ぶ授業に近いものがあつた。それを持ち回りで繰り返していくのであれば、「教え方」に関する受講者の実践経験の蓄積には大きなものがあるだろう。

授業者にとって「教えること」と「教え方」は、どちらも欠かせない両輪である。だからこそ、それぞれについて学び、また、それらを融合させていく機会が確保される必要がある。しかし、この視察を通して、保育者養成に携わる者として、「教え方」に関する意識が特に低かったことが痛感された。これには、自身が授業をする際の「教え方」を集中的に学び、使いこなすに至っていないということと、自身が養成する保育者に身に付けてほしい「教え方」の見極めができていないという二つの意味がある。ケースメソッドを含め、それを使う者、教える者

として、方法に対する理解を改めていくことの必要性を強く感じた。

（２）オープンエンドと結論提示

第二に印象的であった事項として、語り合う題材の結論というべきものの扱いがあげられる。視察時に行われた模擬授業の一つである「企業塾」のケースでは、その政策の良し悪しを話し合った後で、結局それが成功したという「結論」とも取れる内容が紹介された。このことは、基本的にオープンエンドが理想とされるケースメソッドにおいて、判断の分かれる重要な問題であった。

保育カンファレンスなどにおいても、参加者が自由に話し合った後に、担任保育者の見解や事例のその後の様子が提示されることがある。しかしながら、そうした提示が、これまでの語り合いを否定されたり、間違いを指摘されたりするような印象を参観者に与える場合がある。一方で、結論やその先の出来事が提示されないことは、それはそれで消化不良感を抱かせてしまうこともあるだろう。今回の模擬授業では、そのようなケースメソッドが抱える難しさを率直に感じさせられた。

もっとも、今回の受講者は、過去の講義を通してケースメソッドに慣れていたということもあり、結論の提示がそこまで不快感などにつながっている様子は見られなかった。このことは、方法論を使用するにあたっての土壌をいかに構築するかという別の問題を投げかけるものであった。

保育者養成に携わる者は、「教え方」と「教えること」の両方を学び、わが物とすることが求められる。同じく、保育者も子どもたちを相手に教える方法や理念、内容を学び、専門性を向上させるための研修方法を修めることが求められる。今回の視察を通して、「教え方」を学ぶこと、また、「教え方」を教えること（もしくは、「教え方」の「教え方」を）を学ぶことが、自身の課題としてはっきりと認識させられた。そして、「教え方」を学ぶための授業の具体例、「教え方」を学ぶための受講生の熱心さや努力を、自身も授業に参加しながら目の当りすることができた。これらは、自身が保育者養成に携わる者として成長するため、また、教職Pの今後の方向性を考えるための貴重な資源となった。以上の抱負と課題をもって、報告を終えたいと思う。